奈良教育大学紀要　第53巻　第１号（人文・社会）平成16年
Bull. Nara Univ. Educ., Vol. 53, No.1 (Cult. & Soc.), 2004

奈良公園周辺における鹿垣の分布とその残存状況
－フィールドワークに基づく報告と考察－

丹　　敦*・渡　辺　伸　一
奈良教育大学社会科教育講座（社会学）
（平成16年５月６日受理）

A Study of the Distribution of "Shikagaki"(Shishigaki) around Nara Park

Atsushi TAN* and Shinichi WATANABE
(*Department of Sociology, Nara University of Education, Nara 630-8528, Japan*)
(Received May 6, 2004)

Abstract

Deer in Nara - "Nara-no-Shika"- inhabit the area in and around Nara Park in Nara City, the capital of Nara prefecture. In Nara, they have been protected as sacred animals of the Kasuga shrine for a long time. On the other hand, damage to crops caused by them was so serious that the villages in Nara built "Shikagaki"(Shishigaki) during the Edo period. "Shikagaki" is a piece of equipment which is made of wood, stones and mud to prevent damage to crops caused by wild animals, especially deer in the case of Nara. According to our fieldwork, ruins of "Shikagaki" still exist around Nara Park. However, there has been no study to prove where they are located. We would like to propose that the ruins of "Shikagaki" are very precious reminders of Nara's heritage in the sense that they are the products of local villagers' hard work. The purpose of this study is to clarify the distribution of the "Shikagaki" and their present situation.

Key Words："Shikagaki" (Shishigaki), Nara Park, Edo period

キーワード：　鹿垣，奈良公園，江戸時代

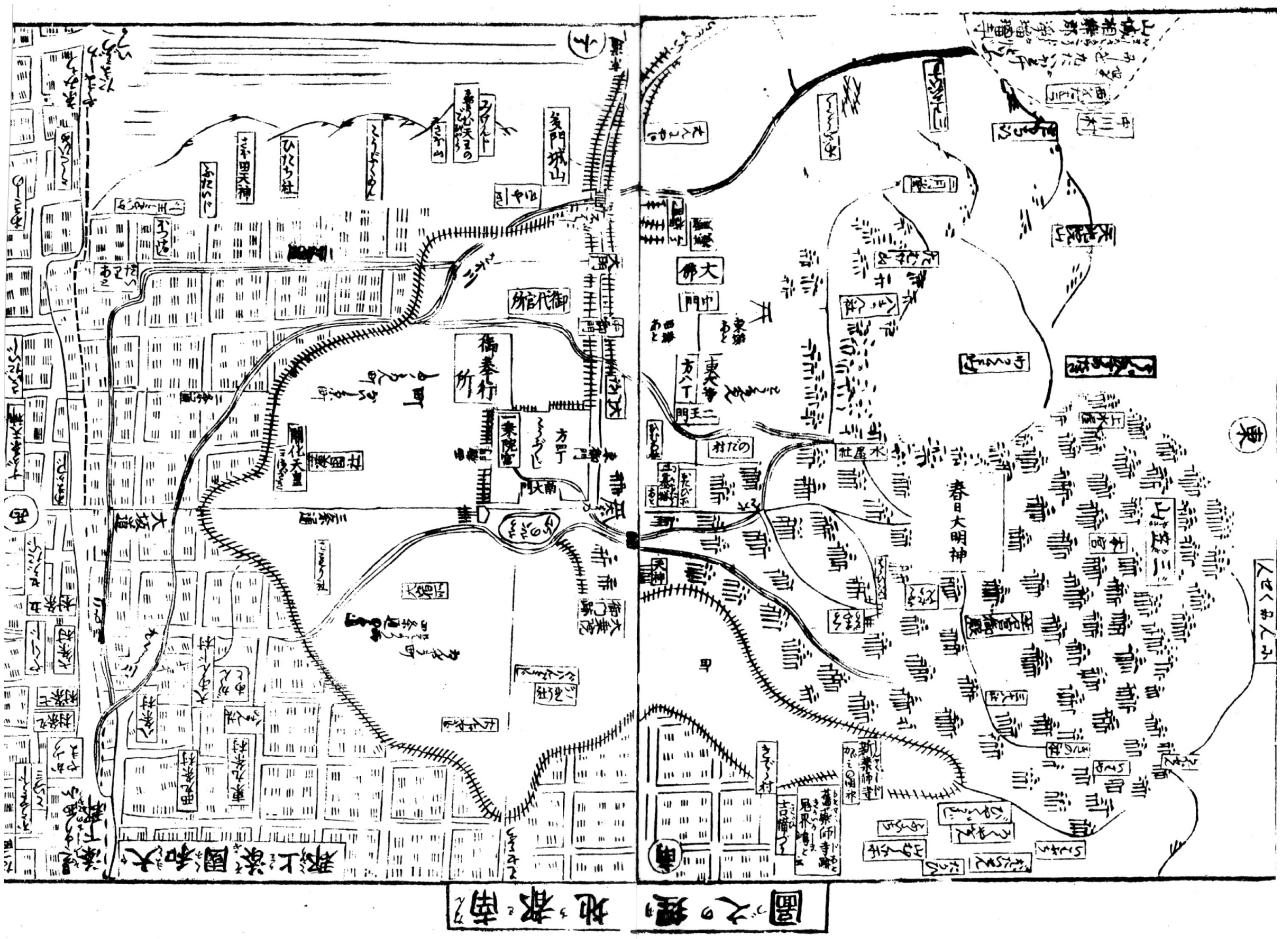
１．はじめに　－課題の設定－

奈良市に位置する県立奈良公園周辺には，江戸時代に築造されたと考えられる鹿垣の一部が，現在でも残っている．本稿での課題は，その鹿垣の分布状況と残存状態の報告にある．

鹿垣とは，野生動物による農作物被害を防ぐ目的で，農地の周囲を木柵，石垣，土塀（土塁）などによって囲み，動物の侵入を妨げる設備のことである[(1)]．個々の耕地を囲む設備は中世頃から行われたらしいが，広大な地域を多くの村落が連合して防御しようとして，協力して鹿垣を築設するという動きは，江戸時代の中期享保～宝暦(18世紀中期)頃から盛んになったとされる（千葉・三橋,1998)．このような動きは，奈良においても同様であったと考えられる．

他方，鉄砲による害獣の駆除は，現代においても一般

＊奈良教育大学大学院修了



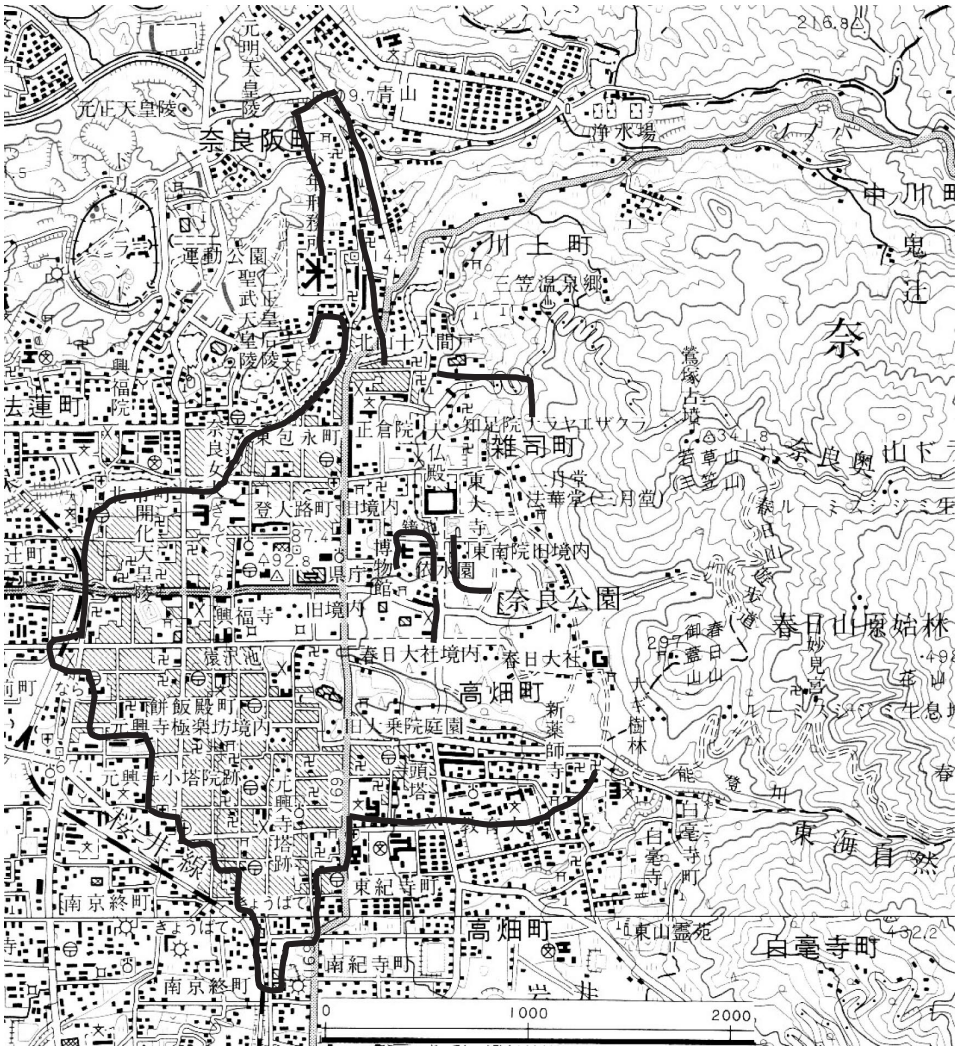
注：地図のタイトルが上下逆なのは，北を上にしたため．
出典：岡本清右衛門（1780）『春日大宮若宮御祭禮図』所収．

図1　南都地理ノ図

的であるが，近世においても同様であったようで，多くの村々では少なからず鉄砲が所持されていた（花井，1995:p.56）．しかし，奈良の場合，鹿は「神鹿」として興福寺や春日社など大和の支配層によって大切に保護されてきたことから，「害獣」として駆除するわけにはいかなかった．したがって，鹿を傷つけることなく，いかに農業被害を防ぐかという課題は，奈良の農家にとっては切実な問題であったのである．

では，奈良の地において，鹿垣は，どこに作られたのだろうか．奈良で，最初に鹿垣が作られたのは，鹿の角伐りが開始された1672（寛文12）年以後しばらく経ってのことだと推定される．これは，奈良の町方と村方の境に結われたもので，目的は，鹿が町方から村方へ出て行き，農産物を食するのを防止するためである（永島，1968:p.196）．1716～1740年頃の作成とされる「奈良町絵図」（天理図書館所蔵）や，1780(安永9)年に発行された『春日大宮若宮御祭禮図』所収の「南都地理之図」には，奈良町を取り囲むように鹿垣が描かれている．図1に，「南都地理之図」を示す．また，図2は，「奈良町絵図」に描かれている鹿垣の位置を，国土地理院発行の地図上（1/50000）に表したもので，総延長は13km以上とされている[2]．

この鹿垣に関しては，大宮編（1995）所収の「奈良奉行所御番日記」の中にその記述を見出すことができる．それは，1707（宝永4）年12月5日に玉井与市右衛門が当番として記した箇所である．概略を記せば，垣結いは，12年前に奈良奉行の命によって開始され，毎年春と秋に，奈良廻り八ヵ村（川上村，野田村，京終村，城戸村，杉ヶ村，油坂村，芝辻村，法蓮村）の農民約100人が，その補修作業にあたっているが，人足（力仕事）や垣結いのための縄等の負担が大きいので，その負担の軽減を奈良奉行にお願いしようとした，というものである[3]．ここから，この鹿垣は，奈良奉行の命によって作られたことがわかる．また，材料に関しては，「垣を結うための縄等」と記されているため，木材や竹等を縄で結った柵状の垣であったようである．



注1：「奈良町絵図」（天理図書館所蔵）に描かれた鹿垣を現代の地図上（1/50000）に記述している．
注2：記述に際し，奈良市立史料保存館の展示「近世奈良町概略図」を参考にした（2004年6月時点）．

図２　町方と村方の境に結われた鹿垣

以上にみる鹿垣は，町方と奈良廻り八ヵ村との境に結われたものであるが，しかし，春日山周辺にある農村部はここだけではない．例えば，春日山北部や東部山間地の農地には，鹿垣は作られなかったのだろうか．今日，奈良の鹿は，春日山周辺の全ての農地で被害を出しており，市の補助による防護フェンスが設置されている．とすると，江戸時代においても，同様のことが考えられるのであるが，春日山の西部以外にも鹿垣が存在したことを証拠づける研究は，今のところ存在していない[4]．また，われわれが調べた範囲では，東大寺や興福寺に残る歴史文書からは，そうした鹿垣の存在を確認できる資料を見つけることはできなかった[5]．

けれども，われわれは，後述するように，現地調査等のフィールドワークによって，現在の奈良公園の周辺においても，鹿垣が存在したことを確認することができた．それは，奈良公園の北部（雑司町，川上町，中ノ川町），東部（大慈仙，誓多林町，須山町），南部（高畑町，白毫寺町，鹿野園町）の３つの地域である．作られた時期は，江戸時代と推定された．確認された鹿垣は，上記の近世奈良町を囲っていたものとは異なり，ほとんどが，いわゆる“築ベイ”，あるいは“築地ベイ”と呼ばれる土塀で，粘土状の土と小石等で構成されたものである．一部には，上部に雨避けの瓦が乗っていたと推察される鹿垣も存在した．これら現地調査によって確認できた鹿垣の分布を，予め記しておけば，図３の通りである．図中に記した記号（Ａ～Ｚ）は，写真を撮った地点を表しており，各写真は本文末にまとめて掲載している．

以下では，現地調査，聞き取り調査，文献調査に基づいて，われわれが確認した鹿垣について報告したい．奈良公園の北部，東部，南部の順に，現存する鹿垣の位置やそれらの繋がり，そして残存状況を中心に記述することとする．

現存する鹿垣遺跡　　現場で繋がりが推定できた箇所

図３　奈良公園北部，南部，東部における鹿垣の分布（1/50000地形図を使用）

２．奈良公園北部の鹿垣
－雑司町（東大寺北側），川上町，中ノ川町－

２．１．鹿垣の位置

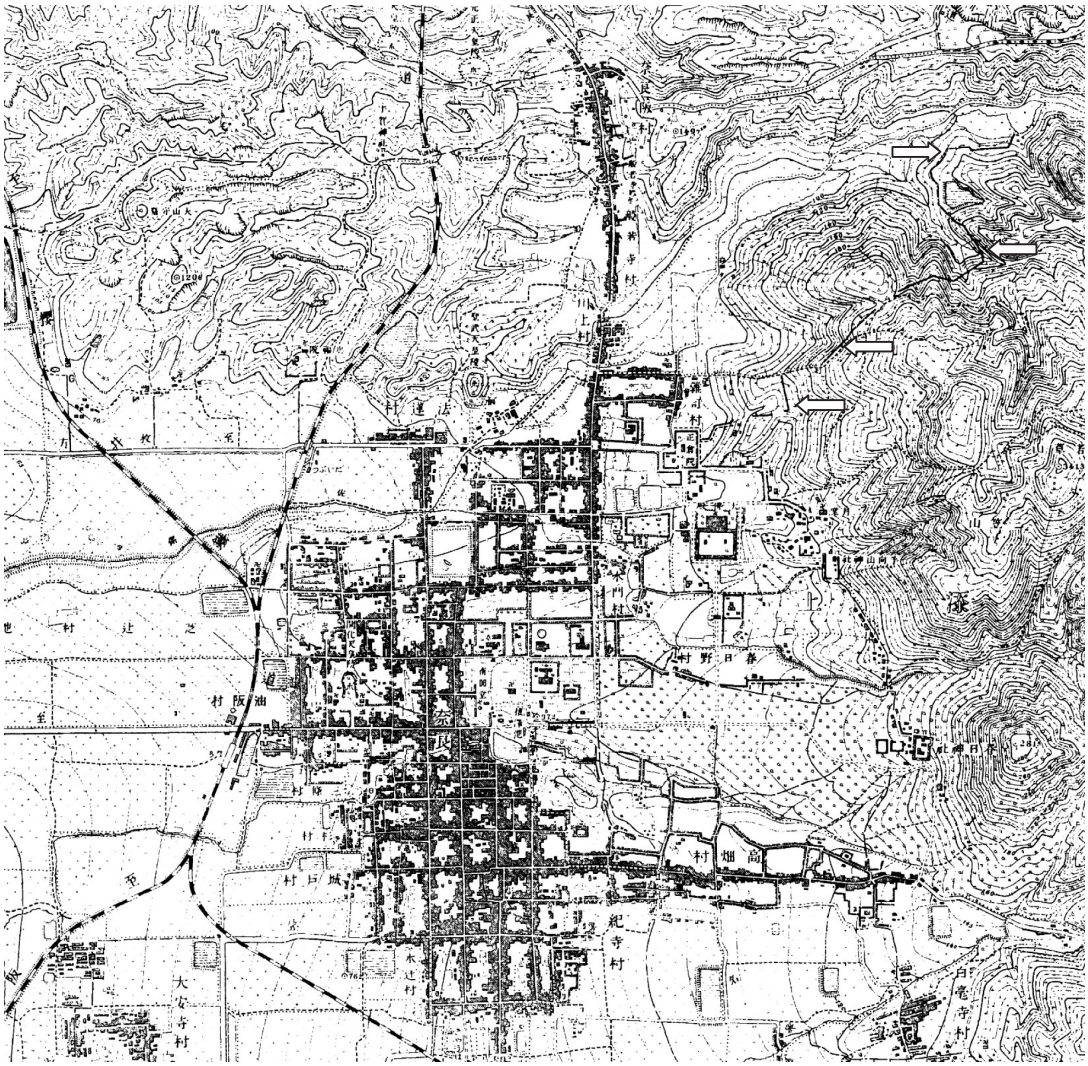
奈良公園北部で確認できた鹿垣は，図３のＡ～Ｋである．町名でいうと，雑司町，川上町，中ノ川町の３つの町にまたがっている．Ａの位置は，雑司町．Ｂ～Ｄは，雑司町と川上町の町境．Ｅ～Ｉは，川上町内である．Ｊ，Ｋを含みＩから東へ続いている鹿垣は，川上町と中ノ川町の町境にほぼ位置している．

川上町在住の西田博治氏（川上農家組合長）は，これを鹿垣であると述べており，戦争が終わる直前頃までは，年に２～３回，村全体で補修作業をしていたという．子供であった氏は，「枕状」の土を用いて，この作業を手伝ったことを記憶している[6]．

また，地元紙『大和タイムス』の1964（昭和39）年の記事には，これに関連し，興味深い記事が載っている．「築ベイの残存調査　シカ害防止の恒久対策に」というタイトルのこの記事によると，「徳川時代の初期にシカの害対策として奈良市の東北，東南部周辺に高さ六尺，延長約六キロにおよぶ“防止築ベイ”が作られ，現在でも破損ははなはだしいが，三分の一ぐらいは使えるだろう」とあり，「奈良の鹿愛護会のシカ守り長・矢川敏雄氏ら三人，奈良市農林課長・池田三郎氏ら三人，被害農家代表・秋田幸造氏（川上町）ら二人の合計八人が，三笠温泉の東側などを調査した」というもので，「ひきつづいて高畑，高円山方面の調査を行うが，調査が終われば，築ベイの補修または金網などを張って農産物を被害から守ることにする」とある（大和タイムス，1964年11月28日付）．

ここにみえる「奈良市の北東」部や「三笠温泉の東側」にある「防止築ベイ」というのが，今回確認された奈良公園北部の鹿垣（の一部）だと言ってよいだろう．

この記事を信ずれば，この鹿垣の築造時期は，江戸時代ということになる．また，西田氏も，川上町の鹿垣について「昔から江戸時代に作られたと言われている」と



注１：山口他編（1975）『日本図誌大系　近畿Ⅱ』210頁の地形図「奈良」「櫟本村」（共に1887年測量，1/20000を1/30000に縮図）を使用した．
注２：図中の矢印で，鹿垣の位置を指示した．

図４　明治期の地形図にみる鹿垣の位置

述べている．確実な証拠としては，川上町有文書に，「鹿土塀見廻給取調帳」（1877（明治10）年）というものがあることから（奈良市史編纂室,1979:p.53），1877年以前に築造されていたことは間違いない．他方，中ノ川町有文書には，「村中鹿垣番附向附帳」（1793（寛政5）年）なる文書が存在することから（藤田,1997:p.61），少なくとも中ノ川町の鹿垣については，江戸時代の1793年以前に築造されたことは確実である．

以上から，われわれが確認したＡ～Ｋの鹿垣は，江戸時代に築造されたと推定される．

ところで，図にみるＡ～Ｉの鹿垣の分布は，一見バラバラにも見えるが，元来は繋がっていた．これは，補修作業の経験のある西田氏の証言からそう言い得る．氏によれば，この鹿垣は，かつては「川上町の山際を囲むように存在し，万里の長城のようだった」と言う．この証言が正しいことは，明治時代に作成された地図からも確認することができる．

図４は，山口他編（1975）『日本図誌大系　近畿Ⅱ』に掲載されている明治時代の奈良の地形図である（明治20年測図，明治31年修正）．これをみると，正倉院の東側から山の中を，おおよそ東北の方角に向かって延びている実線の書き込みが存在している．この実線がなんであるかについて，この本の中に説明はない．しかし，この実線は，われわれが確認した鹿垣の位置と見事に重なっている．つまり，鹿垣だといえるのである．この地図においても，一部，途切れているが，鹿害防止の観点からいうと，以前はやはり繋がっていたと思われる．

とはいえ，図４で確認できる東北方向に走る鹿垣は，

その延長上で切れている．この途切れている地点は，図３でいうとＩの近辺だが，既述のようにわれわれは，この東側においても，鹿垣を見つけている（Ｊ，Ｋ地点）．繋がりから考えても，これらは，かつては，川上町内の鹿垣と一体だったのだろう．このＩから東に延びる鹿垣は，川上町と中ノ川町の町境を走るものだが，おそらく，前述した中之川町有文書「村中鹿垣番附向附帳」にみえる鹿垣（少なくともその一部）のことだと思われる．

なお，鹿害対策のための鹿垣といえども，川や道路上に設置することはできない．西田氏によれば，川には，数本の杭を打ち，鹿の侵入を防いでいた．そして，これも，戦前までは，補修対象であったという．また，道路には，「木戸」と呼ばれる設備を作っていた．同じく西田氏によれば，木戸の高さは，3〜5mで，木造の観音開きの戸であった．最初に設置された時期は不明であるが，戦後には撤去されたという．氏は，２カ所の存在を記憶しており，１つは，現在もある空海寺というお寺の前の道で，もう一つは，川上町公民館横の道路上である．

以上をまとめると，奈良公園北部で確認できたＡ〜Ｋの鹿垣は，かつては，繋がっていたのであり，そのことで，春日山方面から川上町や中ノ川町の農地に鹿が出るのを防止する役割を果たしていたと考えられる．そして，鹿垣が作れない川には杭を打ち，道路上には木戸を設置していた．現在，Ａ〜Ｋの鹿垣の横には，奈良市の補助によって設置されている鹿害防止フェンス[7]がほぼ平行して走っており，現代の鹿垣とかつての鹿垣との位置取りが同じである点が興味深い．では，続いて，これらの鹿垣の残存状況について報告したい．

２．２．残存状況

・地点Ａ：東大寺正倉院の東側で，知足院へと通じる道路脇にある築地塀である．高さは70〜80㎝であり，正倉院寄りのものほど残存状態が良く，知足院に向かうほど低くなり，やがて消失している【写真Ａ】．

・地点Ｂ：正倉院北側の川上町公民館の横から東に伸びる小道の脇で発見した鹿垣である．高さは80〜90㎝あり，その存在は明瞭である【写真Ｂ】．

・地点Ｃ：いわゆる現代版の鹿垣の脇に存在している．高さは70〜80㎝で，ここも明瞭な形で残っている．ただ，山の内部（東側）に入るにつれて高さは低くなり，途切れている箇所も見受けられる．道の両側に設置されていることが特色である【写真Ｃ】．

・地点Ｄ：高さは40〜50㎝でそれほど高くないものの，ここでも，道路の両脇に明瞭な形で残存している．現代版鹿垣に沿うように東に真っ直ぐ山に向かっているものの，三笠温泉郷の位置する南側に向かった所で，現在は消失している【写真Ｄ】．

・地点Ｅ：Ｄ地点で途切れた鹿垣は，地点Ｅで姿を現す．これは，三笠温泉郷の西側のもので，かつて九重旅館という建物が存在していた土地の西側に確認できる．土塀で，高さは50〜60㎝を限度としている．途中で消失しているものの，南西へと伸びている【写真Ｅ】．

・地点Ｆ，Ｇ：三笠温泉郷の東側からさらに東へと伸びている鹿垣で，高さは約80㎝を上限としており，残存状態は比較的良好である[8]．ここでの特徴は，かつて鹿垣の上に乗っていた瓦が周囲に散乱していることである．瓦は，雨風から鹿垣を守るために用いられたと推察される．土塀造りで上に雨避けの瓦が乗っている築ベイは，現在でも，奈良公園周辺の家垣によく見かけられるものである【写真Ｆ，Ｇ】．

・地点Ｈ：上記Ｇ地点の鹿垣とその北部に位置するＨ地点の鹿垣とは，現在は繋がっていないが，既述のようにかつては連続していた．この２地点の間に住宅団地があるのだが，この造成のために壊されたと考えられる．この地の鹿垣は，残存状態が良好であるため，「万里の長城」と呼ばれたかつての姿を垣間見ることができる．高さ約２ｍの箇所も見られ，今回調査した鹿垣の中では最大級の部類である．西田氏が言うように最近まで補修されていたからであろう．所々途切れながらも，鹿垣とわかる形で川上町と中ノ川町の町境付近を，山と田畑の境に沿って東に伸びている．現在設置されている鹿害防止フェンスが平行して走っている【写真Ｈ－Ｉ，Ⅱ】．

・地点Ｉ：Ｈから延びる鹿垣で，高さは50〜60㎝．土塀の中に拳骨大の大きな石が入っているのが特徴的である．東に行くにつれ低くなり，所々消失している箇所もあるが，その繋がりを消すほどではないため，追いかけることは容易である【写真Ｉ】．

・地点Ｊ：この地の鹿垣は，残存状態があまりよくないが，川上町のものとの繋がりから発見することが可能である．高さは30〜40㎝であり，周囲に大きい石が散乱している．所々消失している箇所がある【写真Ｊ】．

・地点Ｋ：高さは50〜60㎝で，周囲の竹林に飲み込まれているが，残存状態が良い部類に入る．ここから東方へ向かうにしたがって高さは低くなり，消失の度合いは大きくなる．ここも，現代版の鹿垣に沿うように存在しており，発見は容易である【写真Ｋ】．

３．奈良公園東部の鹿垣
－大慈仙，誓多林町（上誓多林），須山町－

３．１．鹿垣の位置

次にわれわれが確認できた鹿垣は，大慈仙町から誓多林町（上誓多林）を経て，須山町へと至る長大な鹿垣である（地点Ｌ〜地点Ｓ）．われわれが調べた範囲では，この地にかつて鹿垣があったことを証明する歴史資料は発見することができなかった．したがって，地元住民による証言が，その存在を確定する唯一の証拠ということ

になる．そこで聞き取りを実施したわけだが，大慈仙町の坊正美氏（大慈仙町連合会長，奈良市鹿害阻止農家組合役員）と誓多林町上誓多林地区の飯倉武雄氏（奈良市鹿害阻止農家組合役員）の証言によれば，これは間違いなく鹿垣である[9]．坊氏の幼少期の記憶によると（約60年前），高さは，大人の首の高さくらいで，幅は30㎝ほどだったという．

このＬからＭを経て南下している鹿垣は，途中で柳生街道（東海自然歩道）[10] とぶつかるため，そこで一端切れている．そして街道の南側で再び姿を現すのだが（Ｎ地点），興味深いことに，この近くに住む飯倉氏によれば，かつて柳生街道上には木戸が設置されていた．つまり，この木戸は，街道によって分断されざるを得ない鹿垣どうしをつなぐ役割を果たしていたのである．これによって，鹿が，春日山方面から誓多林町の人里に出てくるのを防いでいたと考えられる．現在も，この鹿垣の西側（春日山側）は森林地帯であり，農地は鹿垣の東部に広がっている．この木戸の役割は，既述の川上町にかつて存在した木戸と同じものといえる．道路上には，鹿垣を作れないため，その代わりに木戸を設置したのである．

この鹿垣は，地点Ｒ，Ｓでゴルフ場の脇を所々途切れながらも南に伸びており，県道奈良名張線の近くまでは，確認することができた．しかし，以後，この周辺では発見することはできなかった．では，この地の鹿垣の残存状況についてみていこう．

３．２．残存状況

・地点Ｌ：大慈仙町と誓多林町（上誓多林）とを結ぶ道路付近の鹿垣で，高さは20〜30㎝と大分低くなっている．所々途切れているため発見は困難を極めた．ただ，周囲と土塀との土質が異なっており，人工的な佇まいがあるため，注意深く観察すればわかる【写真Ｌ】．

・地点Ｍ：柳生街道沿いにある上誓多林の集落から北側の小道（山の麓に位置する神社へと通じる道）を入ったところにある鹿垣．高さは約30㎝程度で，土塀である．この鹿垣の横を，現在鹿害防止用フェンスが沿うように設置されている．ここでも，鹿垣が存在する場所は現在においても鹿害防除に適している，ということを示している【写真Ｍ】．写真の右端に見えるのは茶畑である．

・地点Ｎ，Ｏ：柳生街道の南に位置する鹿垣で，高さは50㎝〜1ｍ程度である【写真Ｏ】．【写真Ｎ】にみる鹿垣の手前にある道標は，柳生街道が東海自然歩道として整備されていることから設置されているものである．また，同じ理由から近くには公衆トイレもある．

・地点Ｐ：この地の鹿垣の中でも，特に残存状態の良いもので，高さは，1.6〜1.8ｍである．ここをピークに，鹿垣の高さは徐々に低くなっている．ここより東側は所々途切れている箇所があるものの，鹿垣とわかる形で明瞭に残っている【写真Ｐ】．

・地点Ｑ：上誓多林の山際の農道に面する材木置場の裏手で発見した鹿垣．高さは30〜40㎝で，建物の陰にあるので，注意深く見なければ発見することは困難である【写真Ｑ】．

・地点Ｒ，Ｓ：以後，鹿垣は，南下しながら，山中を走り，それは「ディアーパークゴルフ場」（1995年9月開場）の敷地へとぶつかっている．そして，このゴルフ場の周囲を囲むフェンス際に，鹿垣を確認することができた．それは，山の小道とゴルフ場の間にあり，ほとんど人目には触れないであろうと思われた．高さは50㎝〜１ｍであり，明瞭な形をなして残っている．これは，森林が茂っているために，風雨による浸食や風化を免れたためと思われるが，ゴルフ場建設の際に破壊されなかったことが奇跡のように感じられた【写真Ｒ，Ｓ】．

４．奈良公園南部の鹿垣
－高畑町，白毫寺町，鹿野園町－

ここまでは，奈良公園の北部と東部における鹿垣の分布と現状を明らかにしてきたわけだが，続いては，公園南部に位置する高畑町，白毫寺町，鹿野園町の鹿垣について報告する．

４．１．鹿垣の位置

ここでも，北部の鹿垣と同様に，『大和タイムス』1964年11月28日付の記事「築ベイの残存調査」が手がかりとなる．この記事に「三笠温泉郷の東側などを調査し」，「ひきつづいて高畑，高円山方面の調査を行う」とあった．ここでいう「高円山方面」とは，白毫寺町と鹿野園町のことだと思われる．では，この高畑町，白毫寺町，鹿野園町にある鹿害「防止築ベイ」の位置はどこなのだろう．

われわれが，現地の探索によって確認できた鹿垣は，図３にみるＴ（高畑町内），Ｕ，Ｗ（以上，白毫寺町内），Ｖ（高畑町と白毫寺町の町境），Ｘ，Ｙ（以上，鹿野園町と白毫寺町の町境），Ｚ（鹿野園町内）である．開発が進んでいるため，残存状態は非常に悪く，地図上に表すとほとんどが点にしかならない．けれども，白毫寺町在住の小山嘉一氏（奈良市鹿害阻止農家組合長）と梅木輝男氏（農業），高畑町の山田耕三氏（農業）の３名の方への聞き取り調査から，これらの繋がりが明らかになった[11]．これらの話を総合すると，かつては，ＴとＵの鹿垣は繋がっていた．また，Ｖ，Ｗ，Ｘ，Ｙ，Ｚの鹿垣も一体であったと考えられる（図５参照）．すなわち，前者は，現在の市内循環バスの通る道路（東大寺から南に延びる道路）から旧志賀直哉邸前の道路を経て，Ｔ地点を通り，現在の東山緑地公園（Ｕ地点）の南端で南西に折れ，鹿野園町の方向へ繋がっていた（西ルート）．また，後者は，Ｗ地点から現在の東山霊苑を縦断し，県道

奈良名張線を横切り，Ｚ地点まで連続していた（東ルート）．これらより，かつてこの地には，長大な鹿垣が少なくとも２本存在したことが判明した．しかし，これら２本の繋がりの有無や築造時期については，わからなかった．

西ルートの鹿垣について補足すると，Ｔ付近の土塀について，山田氏は，「作ったのは誰だかわからない」としながらも，かつては２ｍ程の高さがあり，1950年代までは，「土をレンガ状にして積み上げ，補修していた」という．その頃は，上に平たい瓦が乗っており，「しっかりとした土塀で鹿害を防ぐ役割を十分果たしていた」．また，小山氏も，戦後しばらくは，Ｚ付近の鹿垣がきちんと残っていたのを記憶している．氏の畑が，この付近にあるためである．その一方で，白毫寺町のＵ付近の土塀の鹿垣については，戦前には既に機能していなかったと考えられる．山田氏は，1969年に毎日新聞のインタビューに次のように答えている．

「このあたりの民家には高い土ベイをめぐらせたところが多いんです．春日大社の社家の人たちが自分の庭園をシカから守るために作った名残だといいます．新薬師寺のすぐそばから鹿野園のあたりまで，長い木のヘイが続いていたのを私は子供心におぼえています．いまでも，その一部がどこかに残っているはずですよ」（毎日新聞奈良版,1969年6月19日付）．

この記事からは，西ルートの白毫寺町から鹿野園町までの鹿垣は，山田氏が子どもの頃（戦前）には，既に鹿垣としての役割を果たしておらず，そこで，土塀の代わりに，「長い木のヘイ」が作られていたことが読み取れる．同記事には，「土地の農家の人たちはそのヘイを“万里の長城”と呼びならわしてきた」ともある．「万里の長城」という言い方は，前述のように川上町でも使われていた表現である．土塀が「長い木のヘイ」に代わっても，この地の農家は，奈良公園付近から南北に縦断し，鹿野園町へと続く長大な鹿垣を構築していたのである．

さらに，この地においても道路上に木戸が設置されていたことが確認された．小山氏と梅木氏の話から，高畑町と白毫寺町界隈には，５つの木戸があったことがわかった．設置者はわからない，としながらも，戦後しばらくはあった，という．自動車の普及とともに撤去されたようだ．その５つの内の１つを，【写真ａ】に示す．これは，新薬師寺横の木戸の跡で，奈良公園方面（写真奥）から来る鹿を，農地に行かせないためのものである．2000年段階においても，木戸を取り付けていた２つの柱の内の１本が残っていたのだが，現在は撤去されている．これにより，この地でも，木戸があった時代の面影を知ることは全くできなくなった．

以下では，土塀作りの鹿垣の残存状況について報告したい．

４．２．残存状況

・地点Ｔ：新薬師寺付近の空き地にわずかに残された鹿垣．バス通りから旧志賀直哉邸前の道路を経て，東西に続いていたものの一部．現在の高さは，20～30㎝程度しかない．高畑町では，宅地化や道路建設のため，現在残っている部分はほとんどない【写真Ｔ】．

地点Ｕ：白毫寺町の東山緑地公園にみる鹿垣．高さは50㎝～１ｍと高低差が大きいものの，ほぼ連続した形で公園の東側（山側）を南北に走っている．その後直角に曲がり西へと続いているが，道路と新興住宅地によって消失している．聞き取りによると，かつて，Ｔ地点の鹿垣とＵ地点のそれとは，繋がっていた【写真Ｕ】．

・地点Ｖ：柳生街道が山に入る直前の南側の小道に存在する鹿垣．高さは約２ｍで基盤は土塀である．その補強として現在はトタン板が設置されている．本稿では，Ｗと繋がっていたと推定したが，Ｕと連続していた可能性も否定できない【写真Ｖ】．

・地点Ｗ：梅木氏に教えてもらった鹿垣．氏は，「1.5ｍ程度の土塀で，周囲に瓦が散乱していた」という往時の状況を記憶している．しかし，補修作業を行ったことはないという．現在は，高さ40㎝～50㎝の箇所もあるが，僅かしか残存しておらず，消失程度は著しい．この鹿垣は，南下する途中で，東山霊苑や道路によって途切れている【写真Ｗ】．

・地点Ｘ：東山霊苑の南側で再び顔を出した鹿垣．高さは30～40㎝で，それほど高くないが，連続しているので，その姿は明瞭である【写真Ｘ－Ⅰ，Ⅱ】

・地点Ｙ：Ｘの南の延長上にある鹿垣．高さ30～40㎝で，県道奈良名張線に沿って存在している【写真Ｙ】．

・地点Ｚ：Ｙのさらに延長上にある．奈良春日病院東側にある池に沿うように走る高さ70～80㎝程度の土塀．残存する箇所は短いものの，その状態は良好で，現在も明瞭な形を残している【写真Ｚ】．現在，ＹとＺとは，県道によって，南北に分断されているが，その繋がりの様子から，かつては一体だったと考えられる．池の西側を北から南に向かって伸びているが，東側へと向かったところで途切れている．その繋がりを調査すべく，探索もし，住民（農業従事者）数人にも聞き取りを試みたが，結果として鹿垣らしきものを見つけることはできなかった．

５．おわりに

本稿の目的は，江戸時代に築造されたと考えられる奈良公園の北部，東部，南部における鹿垣の分布状況を明らかにし，同時にその残存状況について報告することであった．

これまで，近世に作られた絵図や歴史資料から，近世

「奈良町絵図」にみる鹿垣　現存する鹿垣遺跡　聞き取り等で推定できた鹿垣

図5　奈良公園周辺における鹿垣分布の全体像（1/50000地形図を使用）

奈良町と村方（奈良廻り八ヵ村）の境に，町方を囲むように鹿垣が結われていたことはよく知られていた（現在の奈良公園西部）．しかしながら，それ以外の鹿垣については，地元住民が知っているだけで，その分布のありようを解明しようとした調査研究は存在していなかった．

また，地元住民による記憶も，当該の町・村内の鹿垣に限定されている．この意味で，奈良公園周辺における鹿垣分布の全体像は，本研究によって初めて明らかになったといえよう．図5は，その全体像を表したものである．

さらに本研究では，鹿垣が設置できない道路や川には，それぞれ木戸と杭が設置されていたこともわかった．鹿垣の築造に加え，道路に木戸を設け，川からの侵入をも防ぐことで，農地を守ろうとする工夫は，全国各地でみられたものであるが[12]，鹿垣研究の空白地域であった奈良公園周辺でも，同様の設備の存在が確認されたことになる．

もちろん，未解明な部分も依然として存在している．特に，北部鹿垣と東部鹿垣の間，そして，東部鹿垣と南部鹿垣との間が，開いているのは気になるところである．元来存在していなかったのかも知れないが，われわれが探し出せなかっただけなのかもしれない．また，各町内に残されている町有文書，例えば中ノ川町の「村中鹿垣番附向附帳」（1793）は，その存在はわかったのだが，まだ閲覧するには至っていない．この意味で，鹿垣の詳細を把握するには，未だ残された課題は多い．

ところで，本稿では，鹿垣の分布を明らかにするだけなく，その残存状況についても記してきた．それは，このままでは風化が進む一方で，いずれは鹿垣が存在した事実さえ忘れ去られて行くであろう現状を憂え，今の状態をできるかぎり記録しておきたい，と考えたからである．全国各地にみられる鹿垣も，その多くは同じような運命にある．しかし，そうした状況に，今日変化が起きている．今まで未確認であったり，記録されていない鹿垣（シシ垣，猪垣）を掘り起こし，その保存と活用をはかろうとする取り組みが，各地で始まっているからである．地理学者の高橋春成氏は，こうした取り組みの意義

を次のように述べている．

「これまで，豪族や貴族，武士にまつわる古墳や城郭といった遺構類が脚光を浴びてきたのにくらべ，農民の汗の結晶であるシシ垣の遺構は，全国的な分布の広がりや長さ数10kmという大規模なものの存在にもかかわらず，注目度は低かった．しかし，シシ垣の価値は高い．そこには往時の農民の生活が深く刻まれており，地域の財産として貴重なものと考えられるからである」(高橋,2003:p.73)[13]．

また，文化庁の花井正光氏（文化財部記念物課主任文化財調査官）は，別の観点から，集落と耕地を囲む猪垣を，生活環境としての内と外を画すことで，自然を排除せず，自然とかかわりながら生活と農耕を持続させてきた時代の遺産，と位置づけ，「持続的で循環型であった伝統的な地域社会の産物のひとつが猪垣であったのだ」と述べている（花井,2003:p.100)[14]．

鹿垣の遺構は，古墳や城郭と比べて決して価値が低いものではなく，「農民の汗の結晶」という意味で「地域の財産」であること，また，「持続的で循環型であった伝統的な地域社会の産物のひとつ」とみなせること，われわれは，こうした高橋氏や花井氏の考え方に強く賛同するものである．奈良の鹿垣も同様の観点からの評価が可能である．しかし，奈良の鹿垣の場合，鹿が神聖視され，政治的にも利用されてきたという長い歴史をも持つがゆえに，他に例のない独特な意義をも有している[15]．つまり，奈良の鹿垣とは，実に重層的な観点から評価できる遺構なのであり，保存の意義は決して小さくないのである．

とはいえ，奈良の鹿垣が，春日の森に埋もれ，人々の記憶からも忘れられている現状では，その重層的な価値も発揮できず，「財産」や「遺産」としての活用の議論もできない．本研究の意図には，そうした議論の活性化の一助となれば，という願いも込められている．

[付記]

本稿は，丹（2004）の第3章に，渡辺による聞き取り記録と収集資料を新たに追加し，再構成したものである．なお，鹿垣遺跡の探索には中澤静夫氏（奈良市立飛鳥小学校教諭・奈良教育大学大学院社会科教育専攻，2003年度現在）の協力を得た．記して感謝いたします．

【写真Ａ】雑司町（2004年6月）、方角：東

【写真Ｅ】川上町①（04年6月）、北

【写真Ｂ】雑司町と川上町の境①（04年6月）、南東

【写真Ｆ】川上町②（04年6月）、北東

【写真Ｃ】雑司町と川上町の境②（04年6月）、北東

【写真Ｇ】川上町③（04年6月）、南西

【写真Ｄ】雑司町と川上町の境③（04年6月）、北東

【写真Ｈ－Ｉ】川上町④（04年7月）、南西

【写真Ｈ－Ⅱ】川上町⑤（04年6月）、南西

【写真Ｉ】川上町⑥（02年10月）、北西

【写真Ｊ】中ノ川町①（02年11月）、北西

【写真Ｋ】中ノ川町②（02年11月）、北東

【写真Ｌ】大慈仙町（02年11月）、北西

【写真Ｍ】誓多林町①（04年6月）、南

【写真Ｎ】誓多林町②（04年6月）、南西

【写真０】誓多林町③（02年11月）、南西

【写真Ｐ】誓多林町④（02年11月）、北西

【写真Ｑ】誓多林町～須山町①（04年6月）、北東

【写真Ｒ】誓多林町～須山町②（04年6月）、北東

【写真Ｓ】誓多林町～須山町③（04年6月）、南

【写真Ｔ】高畑町①（04年6月）、北東

【写真Ｕ】白毫寺町①（04年6月）、北

【写真Ｖ】高畑町②（04年6月）、北西

【写真Ｗ】白毫寺町②（04年6月）、南西

【写真Ｘ－Ⅰ】白毫寺町③（04年6月）、西

【写真Ｘ－Ⅱ】白毫寺町④（04年6月）、北西

【写真Ｙ】白毫寺町⑤（04年6月）、南東

【写真Ｚ】鹿野園町（04年6月）、北

【写真ａ】新薬師寺横の木戸跡（00年10月）、北

[注]

(1)猪垣，猪土手，猪鹿除，猪鹿垣など地域によって多様な呼称がある．猪と鹿は，いずれも“しし”と読むが，“しし”は，その動物の肉が食用となる大型獣の総称で，鹿と猪は，そのような獣の代表である．したがって，例えば，猪垣（ししがき）と呼ばれていても，防除目的の獣には鹿（しし）も含まれている場合がある（千葉・三橋,1998）．春日山周辺を対象とする本稿では，後述する町有文書に「鹿垣」の文字が見えることから，「鹿垣」と表記する．しかし，春日山一帯には，現在もそうであるように過去にも猪が生息していたであろうから，猪防除の役割も担っていたと思われる．

(2)なお，「奈良町絵図」にみる鹿垣の位置と「南都地理之図」のそれとには，違いが存在する．後者では奈良町全体がほぼ完全に鹿垣で囲まれているのに対し，前者の鹿垣は，東部分（山側）が開いている．

(3)全文を以下に記す．この記述を根拠とすると，鹿垣の築造時期は，1707年の12年前であるから1695年頃ということになる．また，本稿では，「毎年春秋両度宛右垣縄結仕候」（毎年春と秋の両方とも垣を縄で結った）を，春と夏に垣の補修作業をしていた，と解釈した．竹か木材を縄で結んだ垣であるから，年に2回くらいは維持管理しないと，壊れる部分も出てくる，と読んだのである．なお，読み下しに関し，本城正徳奈良教育大学教授（日本史）のご教示を得た．

「同日川上村庄や三右衛門・年寄助右衛門，野田村庄屋作兵衛・年寄三九郎，京終村庄屋孫助・年寄甚吉，城戸村庄屋小三郎・年寄藤次郎，杉ヶ町村庄や惣四郎・年寄喜右衛門，油坂村庄や新五郎・年寄孫兵へ，芝辻村庄や新介・年寄善九郎，法蓮村庄や三右衛門・年寄新九郎以口上書申上候者，御下屋敷多門山惣垣之儀，十二年以前子ノ年彦右衛門様御代ニ始而八ヶ村惣百姓共ニ被仰付，則人足并縄等八ヶ村惣百姓共失墜にて垣結仕立申候，夫より以来毎年春秋両度宛右垣縄結仕候，人足凡一度ニ百人程宛入申候，此垣之儀往古より仕来候例無御座候処，十二年以前ニ八ヶ村惣百姓共へ新規ニ被仰付此段何共迷惑奉存，其節彦右衛門様へ御願申上度奉存，御代官大柴清右衛門様へ右之趣御断申上候処ニ，彦右衛門様より被仰出趣ニ候へ者先奉畏，重而折を以御願申上候様ニと清右衛門様被仰付候ニ付，無是非是迄新規之失墜大分仕罷有候，然者小百姓共新規之失墜御赦免被為成下候様ニ，殿様へ願上くれ申様ニと申ニ付，乍恐以口上書御願申上候，御慈悲を以被為聞召上，右垣御赦免被為成下候ハ，難有可奉存候旨申上，菊池門太夫を以達，御耳候処，願書御披見被遊候，併当年者先相勤可申候，重而之儀ハ御了簡も可被遊候間，左様ニ相心得候様ニと被仰出，御意之段申渡候，」（大宮編,1995:pp.333－334）．

(4)奈良市教育委員会文化財課によると，「行政として鹿垣遺跡を調査したことはなく，報告書もない」とのことである（渡辺による聞き取り，1999年11月）．

(5)われわれは，歴史資料における鹿垣の記載を調べるべく，まずは，東大寺図書館員で近世研究を専門としている坂東俊彦氏にお話を伺った（丹による聞き取り，2003年7月）．氏によれば，「東大寺の近世における資料は膨大なため，現在も整理中であるが，これまで鹿垣に関する記述は見たことがない」．そこで，鹿との関係については，興福寺の方が密接であったため奈良国立文化財研究所編『興福寺典籍文書目録』の調査を勧めていただいた．しかし，ここからも，鹿垣に関する記述を見つけることはできなかった．

(6)西田博治氏のお話は，丹が2002年10月に実施した聞き取り記録に基づいている．

(7)奈良市が，1987年度から毎年約1300万円かけて，奈良公園周辺に設置しているフェンス．高さは，約2mで，現在までの総延長は，30km近い．

(8)われわれが最初に出会った鹿垣で，この存在については，奈良の鹿愛護会元事務局長の小船武司氏から教えていただいた（渡辺による聞き取り，1999年6月）．

(9)坊氏への聞き取りは，丹が2003年1月に行った．また，飯倉氏への聞き取りは，渡辺が2000年12月に，丹が2003年2月に実施した．

(10)柳生街道は，滝坂道とも呼ばれる古道で，その歴史は古く，既に奈良・平安時代には，奈良から柳生を経て，笠置（京都府相楽郡）とを結ぶ修験道的性格を有する道であったと推定されている．江戸時代には奈良町と柳生陣屋町とを結ぶ重要な街道となり，1950年代までは，山間地と奈良市街地を結ぶ生活道路として機能してきた（奈良地理学会編,2000:p.88）．

(11)小山氏への聞き取りは渡辺による（2002年2月）．山田氏への聞き取りは丹による（2002年10月）．梅木氏への聞き取りは，渡辺と丹の両名による（2003年11月）．

(12)一例を挙げる．木戸について，沖縄では，「猪垣が山道と交叉する地点には，カキンジョウ・カチンジョウ（垣門）と言われる木柵ようの扉が設けられた．出入りする人はこの扉を開けて交通した」（矢ヶ崎,1993a:p.20）．小豆島（香川県）では，「『カラカラ門』といって，音をたてて自然に締まる門があり，有名であった」（矢ヶ崎,2002:p.88）．安浦町（広島県）では，「地元の農家によるとシシ垣は1950年代まで，役立っていたそうだ．正月が来るたび，住民たちは一年分の薪を切り出すために山に入った．シシ垣に木戸を設け，共同で管理していた」（林,2003:p.97）．鹿垣と木戸はセットで機能していたのである．また，川からの侵入防止策についても，沖縄県国頭村では梯子用の木の柵を川に設置していたし，三重県鳥羽市では流水の振動でなる鳴子を用意したり，という種々の工夫が報告されている（矢ヶ崎,2001:p.130）．

(13)高橋氏（奈良大学）は，こうした視点に立ち，大学と地域との連携によるシシ垣の掘り起こしに取り組んでおり，この活動によって整理できたものを，郷土学習，総合学習，環境学習といった地域の学校教材として役立ててもらうことを意図している（高橋,2003:p.73）．なお，氏は，シシ垣ネットワークとホームページを立ち上げ，シシ垣の掘り起こしを全国規模で推進している．http://homepage3.nifty.com/takahasi_zemi/sisigaki/sisimein.htm　2004年8月30日

(14)花井氏は，こうした視点から，現在沖縄島で取り組まれている猪垣調査を「猪垣の地域文化財としての価値を掘り起こす取組」と評価するとともに，西表島ではじまっているエコツーリズムについて触れ，「この島の原生自然にのみ関心を向けるのではなく，人と自然のかかわり方にも目を向けてこそ，魅力的で意義深いエコツーリズムの実現が期待できよう．その際猪垣は，恰好の素材として活用されるにちがいない」と猪垣保存と活用の意義を論じている（花井,2003:p.101）．

(15)この長い歴史については，今（2000）や渡辺（2000）を参照のこと．

参考文献

千葉徳爾・三橋時雄,1998,「猪垣・鹿垣」『世界大百科事典』日立デジタル平凡社（CD-ROM版）．

藤田和,1997,『奈良の鹿　年譜　－人と鹿の一千年』ディア・マイ・フレンズ（奈良の鹿市民調査会）．

花井正光,1995,「近世資料にみる獣害とその対策　－獣類との共存をめざす新たなるパラダイムへの観点」河合雅雄・埴原和郎編『講座[文明と環境]8　動物と文明』朝倉書店:pp.52－65.
花井正光,2003,「亜熱帯の島の多様な猪垣　－西表島の地域文化財としての猪垣とその活用の意義」『地理』48巻5号:pp.94－101.
林淳一郎,2003,「新聞記者が取り組むシシ垣取材」『地理』48巻6号:pp.94－99.
今正秀,2000,「奈良における人と鹿との関係性の歴史的考察」奈良教育大学「奈良のシカ」研究プロジェクト編:pp.6－27.
永島福太郎,1968,「春日信仰　－春日大社のあゆみ」大佛次郎・永島福太郎・入江泰吉著『奈良　春日野』淡交社:pp.118－206.
奈良国立文化財研究所編,1986,『興福寺典籍文書目録　第一巻』.
奈良国立文化財研究所編,1996,『興福寺典籍文書目録　第ニ巻』.
奈良教育大学「奈良のシカ」研究プロジェクト編,2000,『「奈良のシカ」の研究　－動物保護管理学，歴史学，社会学の視点から』奈良教育大学平成11年度学長裁量経費報告書.
奈良市史編纂室,1979,『奈良市史資料所在目録　第一集』.
奈良地理学会編,2000,『大和を歩く』奈良新聞社.
岡本清右衛門,1780(安永9),『春日大宮若宮御祭禮図』南都書肆.
大宮守友編,1995,『奈良奉行所記録』清文堂出版.
高橋春成編,2001,『イノシシと人間　―共に生きる』古今書院.
高橋春成,2003,「シシ垣探検（前編）―大学と地域の連携のもとに」『地理』48巻3号:pp.73－79.
丹敦,2004,「奈良におけるシカ垣の現状とその保存の意義　－シカ文化を巡る社会学的考察」奈良教育大学大学院社会科教育専攻人文社会専修2003年度修士論文.
渡辺伸一,2000,「＜共存＞への模索と努力　―明治・大正期における『奈良の鹿』」奈良教育大学「奈良のシカ」研究プロジェクト編:pp.28－45.
矢ヶ崎孝雄,1993,「沖縄県下の猪垣（一)」『文教大学教育学部紀要』26集:pp.14－26.
矢ヶ崎孝雄,2001,「猪垣にみるイノシシとの攻防　－近世日本における諸相」高橋春成編:pp.122－170.
矢ヶ崎孝雄,2002,「シシ垣とは何か　―イノシシとの闘いの記録」『地理』47巻12号:pp.84－91.
山口恵一郎他編,1975,『日本図誌大系　近畿Ⅱ』朝倉書店.